FUTURE & PAST

sword art online fun book

18 over

future & past
sword art online fun book

FUTURE & PAST

忘れるなんて許さない
にゃんぞー
5

Catch the Moment
梶原千早
11

もうひとつのやくそく
空音美樹
15

INDEX

HALCYON FACTORY

アスナ…
キリト君…
君の記憶の俺は…
忘れるなんて許せない
byにゃんぞー
大丈夫。ちゃんと覚えてるよ。
ぎゅっ
本当に怖かった…

アスナ…

もっと触れたい

直接触れてもいい？

……
情けなくてごめん…

いいの…
うれしいから
こんなに誰かを愛したことが
ないんだ。だから、アスナの記憶から
俺がいなくなるなんて…

私も怖かった。何よりも大切なものが
私の中から消えていくのが。
悲しくて、つらくて…
ずっ
アインクラッドで
俺がPKをしたとき
君は俺から離れようとした

俺はアスナが離れるなんて許せなかった今度も…

俺を忘れるなんて許せなかった

許さなくていい、忘れられないくらい覚えさせて…

病んだキリトさんでスミマセン。
劇場版観たら、
意外と病んでて、つい。
そして、アリシゼーションの
予告臭い終わり方に、続きが楽しみです。
個人的には、プログレッシブのが
面白いのですが…

今回も、お誘い頂き、
ありがとうございます。
2017.4.19.　にゃんぞー

Catch the Moment

屋台の前に行列ができているのを見て、あたしは大急ぎでゲート広場を走った。滑り込みセーフ。先着３０人しか手に入れられないポン・デ・リング（っぽいもの）ゲット。やった。不定期営業の人気屋台に行き会う幸運は結構低いのだ。

どこで食べようかと周りをキョロキョロしてたら、白い帽子を被った年の近い女の子が、屋台のＮＰＣ店員から売り切れと言われてがっかりしている様子を見てしまった。うう、気持ちはわかるなあ。一昨日、同じ目に遭ってるもん。

う～ん、どうしよう。ちょっと、いや、ホントはかなーり迷ったけど、離れていこうとするその子を追いかけて声をかけた。「半分いかが」って。

女の子は最初は遠慮してたけど、やっぱりポン・デ・リングの魅力には勝てなかったみたい。結局二人で分け合って食べることになった。

モチモチ食感のドーナツは噂どおり美味しかった。グレーズがけさえしてあれば本物そっくりかも。あたしたちはゆっくりと味わって食べる。ああ幸せ。

食べ終えると、女の子が丁寧に頭を下げてきた。

「ごちそうさまでした。あの、半額お支払い――」

「いやいや、いいですって。ホント」

慌てて押しとどめる。なかなか買えないものだけど、高価なわけじゃない。

「なにかお礼ができたらいいんだけど」

「それなら、武器防具のお手入れが必要なときはあたしにご用命くださいませ！」

きょとんとする女の子に、ポーチに常備している羊皮紙を１枚手渡した。友人のアドバイスで作成した、現在の主な営業場所と時間を書いたフライヤーだ。

「え、鍛冶屋？　あなたが？」

フライヤーに目を落としてから顔を上げた女の子は、大きな声を上げた。たしかに女の鍛冶屋は珍しい。たぶん今のところあたし一人だ。彼女は興味を示した。

「なぜ鍛冶屋を選んだの？　生産系スキルにもいろいろあるよね？」

「せっかくだからＶＲならではのスキルにしようと思って。それにね、鍛冶屋なら攻略にも少しは貢献できる可能性があるでしょ？」

「どういうこと？」

「最前線のプレイヤーが望むような武器や防具が作れたら、少しは攻略の役に立てるんじゃないかなあ、なんて思って」

「そっか……そういう方法もあるんだね。……うーん、吟唱スキルじゃムリだなあ」

女の子はなにか思案してる様子で、たぶん無意識に呟く。ふーん、吟唱スキルを取ってるんだ。あたし以上に珍しいだろうなあ。

「吟唱スキルなら、レベルが上がるとエンチャンターになれるんじゃなかった？」

「えっ？」

目を見開いた女の子が、身を乗り出してきた。

「あーいや、詳しいとこまで覚えてないけど、プレイガイドに載ってたような……」

「そうなんだ。ちゃんと読んでみるね。……これでエーくんの手助けができるかも」

立ち上がった女の子は気もそぞろに、それでもきちんともう一度礼を述べてから去って行った。やけに嬉しそうな笑顔を残して。

なんかよくわかんないけど、ドーナツ以上に喜ばせることができた、のかな？

歌声が響く。聞き覚えのあるメロディーに惹かれて、そちらへと走った。
歌い手は広場の片隅にいた。羽根の付いた白い帽子に白いケープの女の子。３、４歳くらい年上に見える。
「空を照らす星よ。丘に吹く緩い風よ。古の都市を行く旅人にどうか加護を」
メゾソプラノの伸びやかな歌声がとても心地よい。聞き惚れてしまった。
歌い終えると、周辺にいた数人のプレーヤーから自然と拍手が湧き起こる。女の子はぺこりとお辞儀をして、そそくさと立ち去ろうとした。
そのとき、あたしが走ったせいで離れて飛んでいたピナが右肩に降りてきた。そばを通り過ぎようとしていた女の子が、気づいて足を止める。
「うわぁかわいい。……あ、ひょっとして、《竜使いのシリカ》ってあなたなの？」
「えっと、はい、そうです」
えへへ、見知らぬ人に名前が知られているのは、恥ずかしい気持ちもあるけど、ちょっと優越感もある。それにピナを褒められて悪い気がするわけない。
「あの、さっき歌ってたのって、はじまりの街の曲ですよね。歌詞があったんですか？」
「ううん、あたしが勝手に作ったの」
「すごくいいです。あたし好きです」
「ありがとう」
はにかみながらも女の子はきれいに笑った。
「いつもここで歌っているんですか？」
「いいえ、特に決めてないの。吟唱スキルをとってるから人前で歌う必要があって、よさげな場所を見つけたときに歌ってるんだ」
「それならはじまりの街で、ＮＰＣ楽団の演奏に合わせて歌ってみるとかどうですか？」
「そうね、たしかにアカペラだけでなくて、伴奏をつけた練習も必要よね」
女の子は真剣な表情になってから、困ったような表情になる。
「レベル上げには転移門広場で歌うのが効率的なんだけど、あんなに大勢の人がいるところではちょっと恥ずかしいかなあ」
「ええと、だったら夜中はどうです？　だいぶ人は少ないんじゃないかと」
「いい案ね。試してみる」
せっかく話が弾んでいいところだったのに、メッセが入った。参加しているパーティーのリーダーからだ。それを期に女の子は立ち去った。
またあの子の歌が聴けるといいなって思いながら、あたしはパーティーの打ち合わせのため、転移門広場へと向かった。

「吟遊詩人ってことだろ」「ふうん、吟唱スキル取ってるやつなんていたんだ」「すっげー上手かったぜ」「ああ、いい声でさ」「しかも可愛い女の子！」「え、それは見に行かなきゃ」「聞きに行くんじゃねーのかよ」「どこにいるんだ？」「３層の転移門広場」「え？　２０層だったぞ」「いやいや、１５層だよ」

Catch the Moment

「歌エンチャンター？」「ホントにバフがかかるのか？」「マジだって。３０分くらいだけど、防御力が上がってた」「俺も毒耐性ついたぞ。夜中に転移門広場で歌っててさ。ちょうどレベル上げのクエストに行くときで、そのあと毒虫相手だったからすっげー助かったわ」「それってパーティーにいると便利じゃね？」「だよなあ」

可愛い女の子はいつだって大歓迎だ。だからその子が声をかけてきたとき、俺はすぐさま愛想良く返事した。出かける寸前だったが、優先順位は決まっている。

それは仲間五人も同様で、我先にと用件を聞こうとしたせいで、小柄な女の子を取り囲むような形になった。明らかに女の子を怯えさせている。慌てて野郎どもに割って入った。

「おめーら、怖がらせてどうする。お嬢さん、申し訳ない。見た目こんなんでも、悪いヤツはいねえからよ」

「あ、はい、いえ、その、お願いがあって」

「なんなりと」

白い帽子とケープの、十代後半と思われる女の子だ。緊張してるのは頼みごとのせいか、俺たちの面構えのせいなのか。

「ええとですね。皆さん、これから圏外に行くんですよね？」

俺はうなずいた。するとその子は少し躊躇ってから、思い切ったように言った。

「歌ってもいいですか？」

「へっ？」

俺たちは意味がわからず、全員が間抜けな面を晒した。女の子は大慌てて両手をせわしなく振る。

「あの、わたし、歌エンチャンターで、バフをかけることができるんです。防御力とか上がるので、やらせてほしいんです」

そういえば、前にそんな噂を聞いたことがあった。

「へえ、本当にいたんだな。そりゃ助かるよ。ぜひ頼む」

「それじゃあ、１曲歌うので、最後まで聞いてください」

その子はほんの少し俺らから離れ、こちらを振り向いた。姿勢を正して、大きく息を吸い込む。そして歌い始めた。

のびやかな歌声が響く。柔らかでいて張りのある声は高すぎず低すぎず、心地よく耳に残る。風林火山に音楽の素養があるやつはいないが、皆一様に聞き惚れた。

やがて歌が終わり、同時に視界にバフアイコンが点った。初めて見る音符のマークだ。

「それじゃ、あたし、これで失礼します」

女の子はお辞儀をすると、さっさと歩き去ろうとする。俺たちが口々に礼を述べると、一度足を止めて笑顔をみせ、もう一度お辞儀をした。

見送りもそこそこに、俺は仲間に声をかけた

「よーし野郎ども、早速出かけるぜ。バフを無駄にするんじゃねーぞ」

意気揚々と、俺たちは出発した。

ギルドホームに戻ると、玄関ホールでハフナーが数人になにやら訓示を垂れている最中だった。圏外での実地訓練から戻ったところか。
「明日は予定通り新人戦だ。今夜は遊びに出ないで休んどけ。以上。解散」
ゲーマーの割には体育会系っぽいのがウチの特色で、特にハフナーはその傾向が強い。序列に厳しいが、面倒見はいい。新人の訓練もこうして積極的に買って出る。
「お疲れ。どうだ、新入りの訓練？」
「まあ順調かな。そっちはどうだった？」
俺は首を横に振った。リンドの代わりに出た会合は、攻略会議以外で交流をもたない攻略組ギルド間の連携のためにとＫｏＢから提案されたのだが、現段階では腹の探り合いといったところだ。情報共有にはほど遠い。
「ああ、でも１つ収穫があったか。ほら例の、歌チャンの話」
歌エンチャンターの噂話を最初に拾ってきたのがこいつだったのを思い出す。案の定、食いついてきたので、仕入れたばかりの情報を披露した。
深夜に転移門広場で歌うが、何層かは決まっていない。１曲聞き終えると、音符の形をした緑色のバフアイコンが表示される。効果は防御力と各種耐性のアップだが、程度と持続時間はまだ不安定。などなど。
さらに服装や容姿について言及しかけたところを止められた。
「見た目はどうでもいい。よし、その子を見つけるぞ。バフをかけてもらう約束を取り付ける。今夜付き合え。他にも手の空いてるやつに声をかけてくれ。各層に張り込みだ」
俺は反対した。なにも今夜から探さなくても、迷宮区に入るまでに間に合えばいい。なにせ明日はフィールドボス戦だ。ところが「フィールドボス戦だから」だと返された。
「さっきの新入りたち、初参戦なんだ。バフが付いてりゃ、ちょっとこう、心持ちが違うだろ？　気休めかもしれないが、できる限りのことはしてやりたいじゃないか」
おまえってホントいいやつだよな。心からそう言いたいところだが、本気で嫌がるだろうからやめておく。俺の内心を察したらしく、ハフナーがこちらを睨んだ。
「頼んだぞ、シヴァタ」
「はいはい。手配いたしましょう」
俺はとりあえずは渋々といった体で従うことにした。

それぞれの心の片隅に残された記憶の欠片。それは、彼女があの世界で生き抜いた証。

もうひとつのやくそく
空音 美樹
俺を信じてくれアスナ
うん！
アスナ…
キリトく…

んっ！
ハァ
ハァ…
あふっ

ハ
ぎゅ
キュッ
アスナ…？
…ごめん
キリトくん…
今は
ちょっと…
不安なの
ごめん
アスナ！
君の状況を
考えずに…！
…ね
キリトくん
新しい約束
作ろうか
え？

今の問題が
片付いたら…

いっぱい
いっぱい
エッチしよ?

分かった

約束する

もう一度闘うよ
きみのために
おれのために――

帰ったら
約束の続きをしよう

なんだか急に視界がおかしいんですけど…
パパ ママ！
あ
!!
星が見えません！

あれ？システムエラーかな？

どれどれ…

ごめんねユイちゃん

ほら…

これならどうだ？

はい！

見えるようになりましたパパ！

親ってこういうとき大変なんだな

ふふ

さて…と

寒くないか？アスナ
うん…ちょっとね
でも
キリトくんがあったかくしてくれるんでしょ？
おう！まかせとけ！
CHU
あっ…

アスナ…
はぁ…っ
ふにゅっ
くりっ
ひあっ
くちゅ
はぁふん…
キリトくぅん…

あぁん…
キリトくん…
ぴちゃ
はぁうん…
そんなにきつくしちゃダメぇ
ちゅぅっ
…あっ

アスナ…
もうぐっしょりだ
やぁん
だってずっとしてないじゃない？
ま男ですからそれなりに…
ね
…ってキリトくんは違うの？
はっ！
我慢させちゃってごめんね
私のヒーローさん

情けないよ
え？
アスナのSAoの記憶がなくなったとき
俺たちの関係もなくなってしまうんじゃないかと
本当は不安になってたんだ
キリトくん…
私たちの心に仮想世界は関係ないよ
でしょ？
ああ
そうだよ
俺たちには過去に負けない今がある——

挿入れるよ
キリトくん…
ああ
アスナ…
ピクン
くち
はぁ…

キリトくんと繋がってるだけですごく気持ちいいよ
ああ俺もだよアスナ
でもって…
俺も気持ち良すぎて
あんまり持たせる自信ないよ

じゃあ
私と一緒にいこうキリトくん！
おうっ！
イクぞアスナ！
やだ
なんかその言い方ムードないなぁ
あん
そうか？
ひあっ

キリトくんっ
はぁ…
前よりたくましくなってる？
ああ
アスナに言われたからな運動不足だって
はぁん
あふっ
はあ…ん
あそっか
あはっ…
おかげでARにもすっかり慣れたぜ
うふん

アスナッ！

あぁあっ

キリトくんっ！

はぁ…

はぁ…

……マ

パパ！

あ

さっきからなんだか
おサルさんみたいな
声が聞こえてます

あれ？
またなんかの
エラーかなぁ

おサルさんて…

大丈夫で

in.

FUTURE & PAST

sword art online fun book

HALCYON FACTORY